

紀 要

第10号

— 目 次 —

序	
縄文時代石器研究の方法論序説	(鈴木 康 二)
弥生社会からみた独鈷石	(田 井 中 洋 介)
犬上川左岸扇状地における考古学的研究	(近江歴史クラブ)
犬上川左岸扇状地における須恵器編年試案	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地の古墳群について	(北 原 治)
近江における階段式石室の検討	(堀 真 人)
犬上川左岸扇状地における無袖式横穴式石室	(辻 川 哲 朗)
古墳時代後期から終末期にかけての土壙墓の問題点	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地の古墳にみられる習俗の研究	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地における馬具副葬土壙墓について	(山 中 由 紀 子)
犬上川左岸扇状地における古墳出土の土器様相について	(中 村 智 孝)
犬上川左岸扇状地周辺の生産と流通の概観	(畑 中 英 二)
東大寺水沼荘の開発	(神 保 忠 宏・畑 中 英 二)
「湖東系軒丸瓦」に関する基礎的考察	(重 岡 卓)
古代王権論にむけて	(細 川 修 平)
日野町出土の瓦器碗をめぐって	(土 垣 幸 徳)
滋賀県伊香郡高月町井口集落周辺の水利と環境	
井口城とその立地	(神 保 忠 宏)
水と環境教育	(佐 野 静 代)

1997. 3

(財)滋賀県文化財保護協会

縄文時代石器研究の方法論序説

～石匙を考える 縄文時代前期末にみる技術革新～

鈴木 康二

はじめに

縄文時代における当時の社会等を復元しようとする場合、どのような検討が必要となるのであろうか。人類学はもとより、生物学、地理学、民族学、民俗学、経済学、社会学そして考古学を含む歴史学などを考慮しつつ検討すべき課題であることは言うまでもない。筆者は、考古学にその研究フィールドをおいているため、考古学に重点をおいて検討したいと考えている。では、考古学において上述の課題を考えようとする場合、一体どのような方法／視点が有効と言えるのであろうか。

考古学は、「モノに始まりモノに終わる」と言われるように、当時の「モノ」を主たる研究対象としている。従って「モノ」の様相を把握することがその主眼となり、当時の生業から社会まで様々な部分を反映していた、その技術体系を中心に復元しようとする場合においては有効な手段であろうと、筆者は考える。本稿においては、これらの点を念頭において、いわゆる縄文社会の復元を目的とする基礎研究として、石器製作技術の変遷の一端を考え、石器研究における方法論を模索してみたいと思う。

1 研究史抄

さて、縄文時代を象徴する石器器種としては、石鏃や石匙などがあげられよう。どちらの器種においても、これまで様々な研究が為されてきた。ただ、表象的な部分に囚われた組成論にその重きがあるのは、依然否めないように感じるし、技術論的あるいは、機能論的な検討というものも為されてはいるものの、それらを統括した、例えば縄文社会を復元する所にまで昇華しえるような研究は少ないように思う。

そこで本稿では、石匙を例にとりて若干の検討を加えてみたい。石匙は、一般に「つまみ状の小突起を有し、片面あるいは両面からの加撃により刃部（機能部）を作出した打製石器」として定義づけられる石器器種である。縄文時代の中においては、お

およそ日本列島全体、特に東北地方以北に頻繁に認められる器種である。一般的には、縄文時代早期前葉に出現し、同早期末葉には定着すると考えられている。東北地方以北における円筒土器系様式期のものは、質量ともに豊富である事が知られ、また西日本特に東海・近畿・北陸地方では、前期後半の北白川下層式に伴う、整った三角形を呈するいわゆる横型のものの存在が顕著であろう。現時点では、中部・関東以西の地域では、中期以降の石匙は極めて数量的かつ製作技術的に貧弱・稚拙になり、大形粗製のものが若干目立つにすぎない、という理解が為されているようである。一部弥生時代にも類似した形態の石器が認められるが、基本的には縄文時代晩期までに消失する器種であるといえよう。

さて、石匙については、これまでいくつかのまとまった研究が為されている。中谷治宇二郎は、全国から収集された約750個の石匙を用いて、形態分類と地域圏的分析を行なっている（中谷1925）。石匙を、形態的に縦型と横型の2種に大別することを、はじめて体系的に行なった研究として、さらには石匙の総体を理解しようとした、はじめての全国的な研究としても注目される。

その後の研究においては、五味一郎氏がまとめたものがある（五味1983）のでそれに基づいて概観してみたい。その研究は、第1に、その形態・製作技術・分布等の分析によって石匙を認識しようとする基本的なもの、第2に、石匙を道具（生産・生活用具）として捉え、機能や用途を究明しようとするもの、第3に、石匙の用途をあらかじめ想定し、それをもとに当時の社会や文化を解明しようとするもの、という大きく3つの方向性にまとめる事ができよう。紙数の都合もあるので、あまり細かくは触れないが、いずれの研究においても、個別の事例の検討に留まっていたり、表象的な形態に基づいた解釈に依拠している感は否めないであろう。

ただその中で、筆者の興味を引いたのは、秦昭繁氏による松原型石匙の検討である。氏は、ある種の

特徴的な製作工程を有する石匙を‘松原型石匙’として設定し、その分布域や帰属時期について検討を加えている。氏によれば、松原型石匙の場合は、早期末から前期前葉において確認されるものとして理解しえるようである。また、ある程度広域（ほぼ東北地方全域）に分布するものとしても認識されている（秦1991）。広義での‘石匙’の中でも、ごく一定の属性を有するもののみが、限られた時期に、完成された形で出現し、さらに突然とも言えるその消失が確認されているのである。その背景には、一体どのような社会的変容（もちろん自然環境の変化をも含む）が考えられるのであろうか。またこの松原型石匙以外に、同様の傾向を示すものは確認されないであろうか。もしあるのならば、その成因等を考える場合には、考慮すべき類例であろう。

2 問題点の整理

さて、研究史を振り返るなかで、筆者は以下に述べる大きく二つの疑問を抱いた。

第1に、製作技術／工程の復元は、ごく一部の資料で為されているだけである。これは石匙だけではなく、他の石器器種においてもさらに検討されなければいけないことであろう。縄文時代の石器製作が、これまで一般に言われているような、2次加工技術の精緻化・多様化が事実であるとするならば、素材獲得工程のみならず、製品が出来上がるまでの技術／工程を復元することによって、より明瞭に製作者の意図（もしくは認識レベル）を確認できるのではないかと。と同時に、例えば松原型石匙で為されたような、技術面での時間的／空間的変容の観察によって、その背景における社会あるいは環境の変容を考える事をも可能にし得るであろう。

第2に、石匙の形態的状况と、一部の出土状況から、機能・用途の一端は推定しうるものの、現段階ではそれ以上でも以下でもないはずである。石匙の機能・用途については、決定的な定説は提示されていないものの、一般的には動物の解体や木工用の道具としての、多目的な機能・用途をもった石器として推定されることが多い。また、石匙のつまみ部には、タールあるいはアスファルトが付着している資料も確認されているし、宮城県山王遺跡からは

‘ひも’の付いた石匙も発見されている。これらのことから、携行用多目的石器あるいは、着柄して用いる石器として考えられているようである。使用痕分析等はされているものの現時点では、決定的な結論は導きだされてはいない。さらに言うならば、その一方で、石匙は‘多機能・多目的’な石器であることを想定しているにも関わらず、実際にはつまみ部＝装着部として判断されているようである。果たして、前述の機能・用途は、一般的な事実として認識しえるのかどうか。

参考までに、栗津第3貝塚出土の資料では、作出されたいわゆる刃部と抉入部の刃角を比較した場合、明瞭な差は見られない。したがって本来ならば、その道具が‘主に’どのような用途で用いられていたのか、ということは常に考慮すべきなのであろう。

それよりもむしろ、石器研究において必要なのは、石器が定形化する理由・意義や、あるいはその使用対象物の特定から環境復元を目的とした分析を行なおうとする視点ではなかろうか。そのために必要な情報が抽出できていれば、現時点では問題ないのではないかと考えている。その上で、当時の人間の、その道具に対する‘共通認識’を抽出して行くべきなのであろう。

さて、この2つの課題を解くことによって、石匙に関わる事実というものが、より明確にできるのではないかと考える。ただ第2の疑問については、その資料的制約や、あるいは方法論の再考等が必要であるため、現時点での検討は不可能に近いと思われる。そこで本稿においては、第1の疑問について検討することにする。また本来ならば、石匙の出土状況等を含めて、できるだけ条件をそろえて検討を加えるという段階を踏む必要がある。従って、本稿においては、基本的には貝塚出土資料に限定し、また、地域を近畿とその周辺に限定して論を進めたい。

3 石山貝塚／鳥浜貝塚／栗津第3貝塚出土の石匙の比較検討

(1)遺跡の概要と各遺跡出土の石匙の観察

各遺跡出土資料の基本的観察

本稿においては、石匙の①平面形態、②製作技術、③使用石材について検討を加える。①平面形態につ

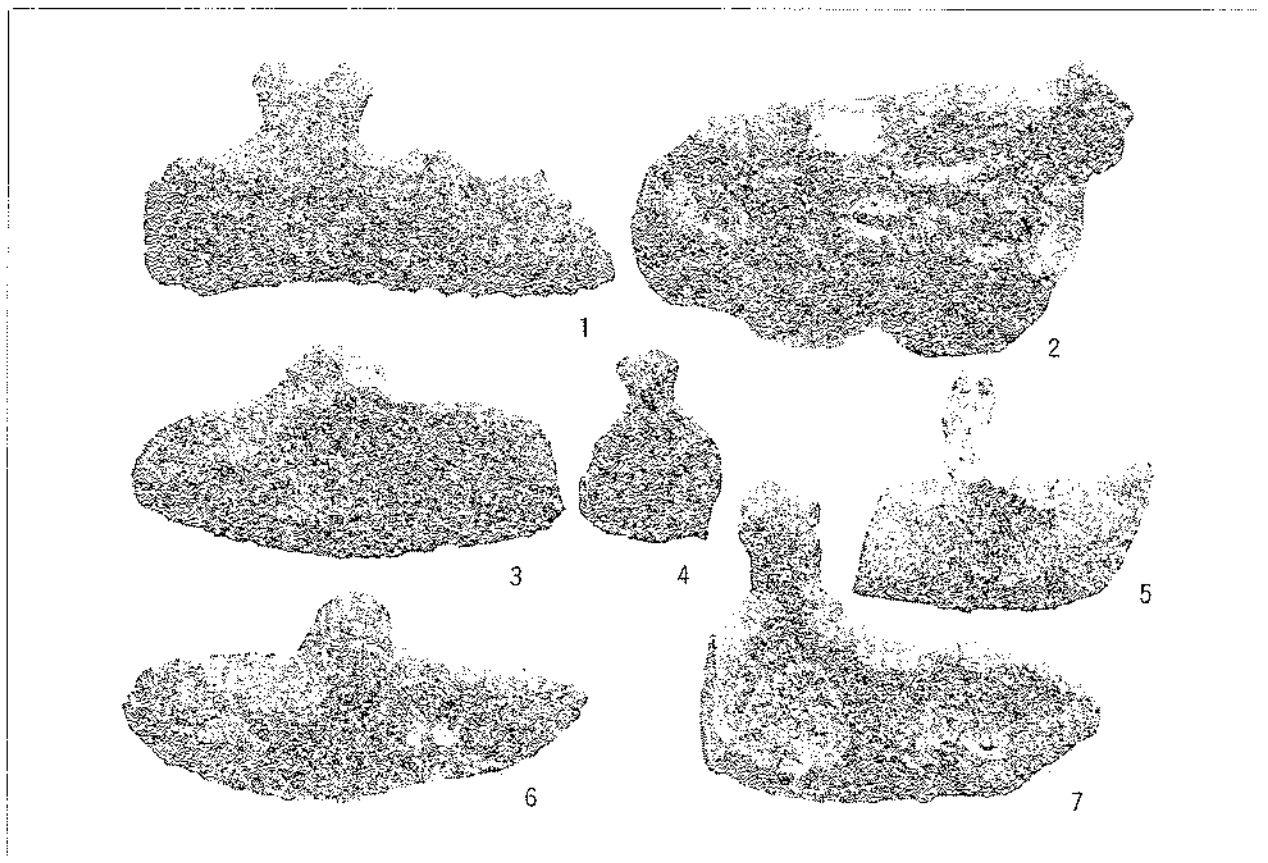


図1 石山貝塚出土石匙 (スケール1/1)

いては、いわゆる横型か縦型か、身部の形態、さらに左右対称か（もしくはつまみ部が中軸線（主要刃縁に対する垂線）上にあるかないか）等について観察する。また②製作技術については、(a)素材剥片の使い方、(b)2次加工（調整）が、押圧剥離（‘1枚の剥離面が縁辺から中央部にまで及んでいる’剥離痕を、押圧剥離によるものとして認定）による全面調整か、押圧剥離でない調整剥離がほぼ全面に及ぶか、周縁のみに留まるか、の2点について確認する。

石山貝塚 (図1)

石山貝塚は、滋賀県大津市石山寺3丁目に所在し、縄文時代早期に形成された淡水貝塚で、同時期に帰属する遺物を中心に、埋葬人骨等も確認されている。本遺跡からは、8点（詳細は不明、報告書掲載資料点数）の石匙が確認されている。

①基本的には、いわゆる横型を呈するもので構成される。身部は、(長)楕円形に近い不定形なものが主体で、若干扇形に近いものも見受けられる。破損品が多いため詳細は不明だが、左右対称（つまみは中軸線上に位置する）のものと同でないものが

ある。

②(a)素材剥片の打点側を、つまみ部側においているものと、特に指向性の認められないものがあるように見受けられる。

(b)基本的には、周縁部のみの調整加工に留まる。

③基本的には、サヌカイトが用いられているが（サヌカイト製7点）、チャート製のものもわずかに（1点）確認されている。

鳥浜貝塚 (図2)

鳥浜貝塚は、福井県三方郡三方町に所在し、縄文時代草創期から早期、前期に帰属する遺物が確認された遺跡である。貝塚以外にも、住居址等も確認されている。本遺跡においては、各層から出土している土器の型式分類に基づいて、S I～Z V期（縄文章創期から前期末）までの時期設定が為され、石匙はZ I期以降に確認されている（詳細な点数等は不明）。

①いわゆる縦型のものは、Z I期に確認されているが、大半はいわゆる横型を呈する。身部の形態は、Z I～III期は、楕円形から扇形に近い不定形が主体、

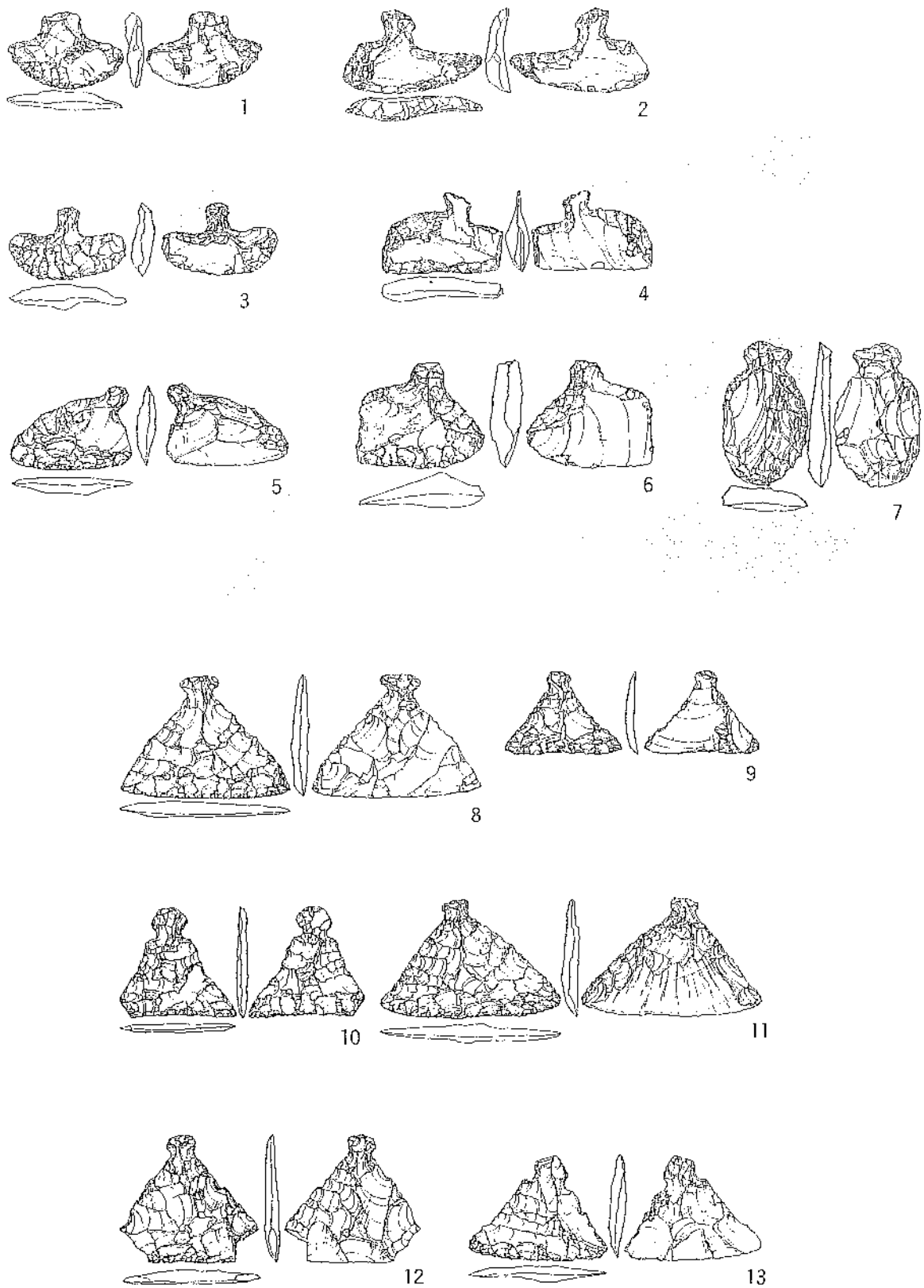


図2 鳥浜貝塚出土石匙 (スケール約2/5)

Z IV・V期（いわゆる北白川下層Ⅱb・c式期）において数量的にも増大し、また三角形のものを主体に、台形を呈するものが確認される。Z I～III期は、つまみ部が中軸に対して斜交するもの、中軸と平行だが左右どちらかにずれるものが主体で、若干左右対称でつまみ部が中軸線上に位置するものが見られる。Z IV・V期は基本的に左右対称で、つまみ部も中軸線上に位置する。②（a）三角形・台形を呈するものは、基本的に素材剥片の打点側をつまみ部側においているものと思われる（ただし、全面に2次加工が及んでいるものが多いため比率等は不明）が、それ以外のものは、素材剥片の打点側を刃縁側（つまみ部を上方にしておいた場合の下縁もしくは側縁）においている。（b）三角形・台形を呈するものは、押圧剥離による全面調整が施されたものが主体である。それ以外のものは、基本的には周縁部のみならず2次加工が施されている。

③三角形・台形の場合はサヌカイトが主体で、それ以外のものはチャートが主体である。

粟津第3貝塚（図3）

粟津湖底遺跡は、滋賀県大津市晴嵐1丁目の琵琶湖底に所在し、縄文時代早期から晩期に帰属する遺物が確認された遺跡である。第1、第2、第3の3つの貝塚によって構成されている。今回は、そのうちの第3貝塚出土の資料に限定して話を進める。第3貝塚は、縄文時代中期前半（船元Ⅰ式主体）に帰属する貝塚である。粟津第3貝塚からは、16点の石匙が出土している。

①いわゆる横型のものを主体として、いわゆる縦型のものも2点確認されている。いわゆる横型のものの身部の形態については、楕円形から扇形に近い不定形が主体である。左右対称のものと、つまみ部が中軸線に斜交あるいは平行するものがある。

②（a）素材剥片獲得段階においては、多様なバリエーションの存在が予想される（本遺跡においては、剥片を素材として供する以外に、小型で扁平な円盤を素材として用いている場合もある）。素材剥片を加工する段階、特に素材剥片のおき方については、素材剥片の打点側を、つまみ部側においているものと、刃縁側（つまみ部を上方にしておいた場合の下縁もしくは側縁）においているものがあるが、形態

等との関連性は見出しされない。

（b）基本的には、周縁のみならず2次加工が施されているが、若干ほぼ全面に及ぶものもある。④剥片を考慮すると、サヌカイトが主体で、若干チャートも確認されるが、石匙については、全てサヌカイト製である。

②3 遺跡に見る石匙の比較

3遺跡から出土した石匙を比較すると、以下の点が看取できよう。

①平面形態については、身部の形態におけるバリエーションが、石山期から鳥浜Z I～III期を経て、鳥浜Z IV・V期に多様化する（三角形・台形を呈するものが組成に加わる）ものの、粟津期には若干洗練されつつも、石山期に類するものになる。また、つまみ部が中軸線上に位置する左右対称のものは、鳥浜Z IV・V期にのみ主体を占める。この点からは、鳥浜Z IV・V期（すなわち北白川下層Ⅱb・c式期）にその特殊性が見い出せそうである。

②製作技術については、（a）素材剥片の用い方も（b）2次加工技術の様相にしても、基本的には伝統的とも言えるような、技術の踏襲が認められる。ただし、鳥浜Z IV・V期のものに関しては、（a）にしても指向性が見受けられるし、（b）でも異質の剥離技術が用いられている。この点からも、①平面形態と同様に、鳥浜Z IV・V期（すなわち北白川下層Ⅱb・c式期）にその特殊性が見い出せそうである。

③使用石材については、結果として、平面形態とそれに供する石材に、ある程度関連性が認められる場合と（石山／鳥浜）と全ての形態について同一の石材を用いる場合（粟津）に分けられるようである。その背景としては、主にその入手経路を含めた獲得システムと、地域的差異に影響を受けたものと思われるが、選択性の存在も考慮すべきかも知れない。その一方で、石材に対する指向性としては、石山と粟津の類似性と、それに対して鳥浜の特異性が看取されるが、この理由も時間差以外に、地理的要因等も考慮しなければならぬため、現時点ではその相違を明確にすることで留めておきたい。

従って、形態的側面および技術的側面においては、

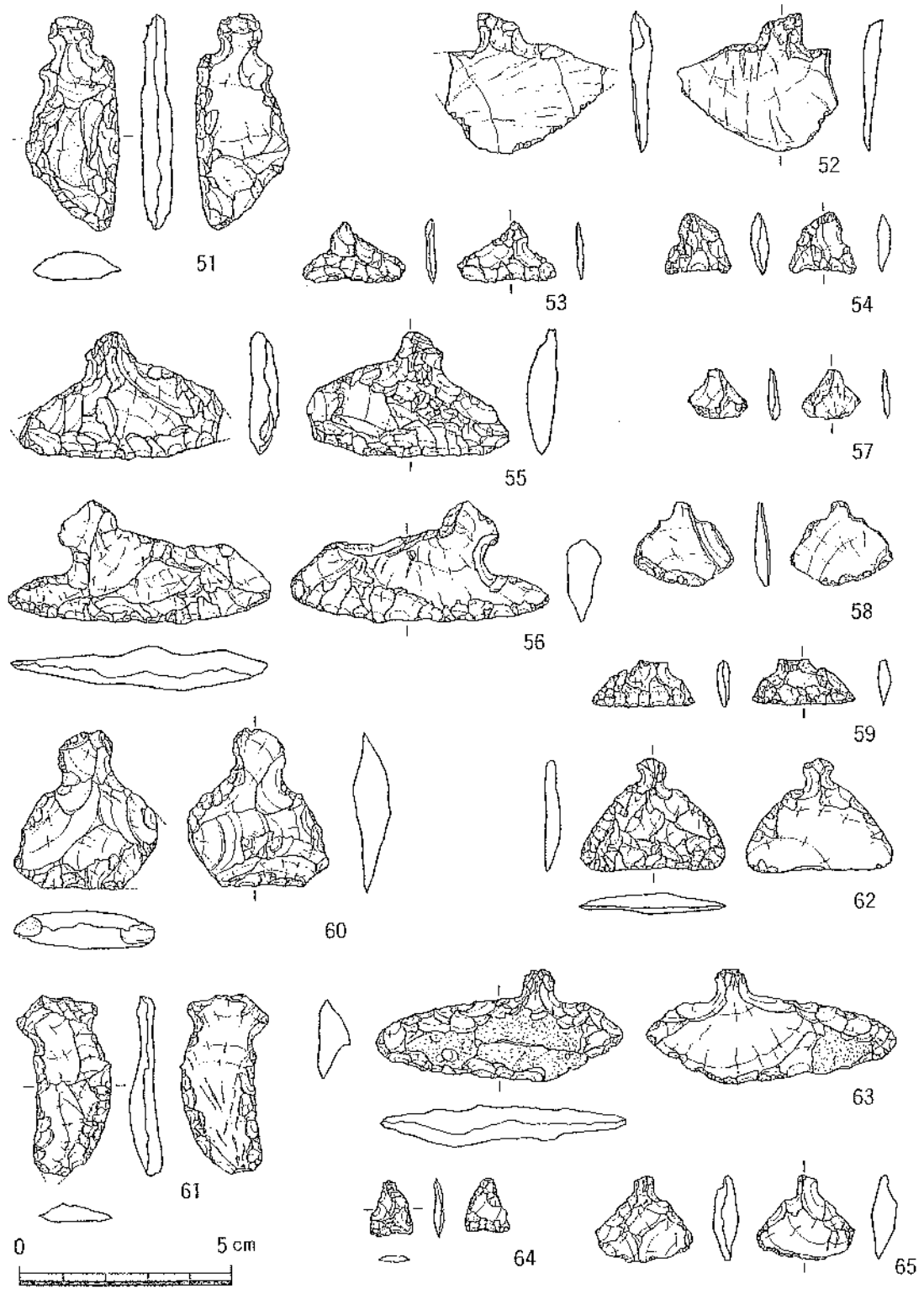


図3 粟津第3貝塚出土石匙(遺物に付した番号は報告書記載の番号と同一)

北白川下層Ⅱb・c式期にその特殊性を見出すことができると言えよう。ただ使用石材については、時間の経過に左右されるのみならず、獲得（流通）システムと地理的条件に多分に影響を受けられるので、形態的側面および技術的側面とは分離して検討を加える必要があるだろう。

(3) 周辺遺跡における石匙の様相

ここまでの検討から、形態的側面および技術的側面においては、北白川下層Ⅱb・c式期にその特殊性を見出すことができそうである。では、周辺地域における様相においては、それを追証しえるのであろうか。蓋然性を高めるために、貝塚出土以外の資料で若干検討を加えてみたい。

〈滋賀県〉

下鉤遺跡（栗東町）

北白川下層Ⅱ式期前後（諸磯系を含む）を主体とする遺跡で、身部が三角形・台形を呈し、つまみ部が中軸線上に位置する左右対称のもので、押圧剝離が全面に及ぶものが確認されている。また、先端の尖ったいわゆる縦型のもので確認されている。

霊仙寺遺跡（栗東町）

船元Ⅱ式期前後を主体とする遺跡である。身部の平面形態については、かなりのバリエーションが確認されていて、つまみ部の位置についても特に指向性は見受けられない。技術的には、周縁部のみならず2次加工を施して成形するものがほとんどで、素材の用い方には、特に指向性は認められない。なお、この形態／技術の様相は、やはり船元Ⅱ式期前後を主体とする、讃良川遺跡（大阪・寝屋川市）においても、類似した傾向が確認されている。また、下鉤遺跡においても確認された先端の尖ったいわゆる縦型のもので確認されている（本遺跡では石鏃として分類）。

〈岐阜県北部（飛騨地域）〉

追分遺跡（岐阜県揖斐郡藤橋村）

明確に遺構に伴う資料ではないが、早期もしくは後晩期の土器に伴う可能性のあるものが確認されている。いずれも身部が楕円形で、つまみ部が中軸線に斜交する、周縁部に2次加工が施されているもので、素材剥片の打点側は、つまみ部から一番遠い端

部におかれている。形態・技術的には、石山貝塚出土のチャート製のものに類似している。

御望遺跡（岐阜市）

遺構内埋土出土資料としては、北白川下層Ⅱc式期（および諸磯系土器様式期）において、身部が三角形・台形を呈し、つまみ部が中軸線上に位置する左右対称のもので、押圧剝離が全面に及ぶものが確認されている。その一方で、身部が楕円形で、つまみ部が中軸線に平行・斜交する、周縁部中心に2次加工が施されているものも確認される。なお、続く北白川下層Ⅲ式～大蔵山式期においては、身部が三角形・台形を呈し、つまみ部が中軸線上に位置する左右対称のもので、押圧剝離が全面に及ぶものはほとんど確認されなくなる。

門坂シズマ遺跡（岐阜県益田郡小坂町）

明確に遺構に伴う資料は確認されていないが、鷹島式もしくは新保・新崎式期に、身部が楕円形で、つまみ部が中軸線に平行な、周縁部に2次加工が施されているものが確認されている。

堂ノ前遺跡（岐阜県吉城郡宮川村）

遺構内埋土出土資料として、曾利Ⅱ式や古串田新式期に、身部が楕円形で、つまみ部が中軸線に平行・斜交・直交（いわゆる縦型）な、周縁部に2次加工が施されているものが確認されている。

参考までに、未発表資料であるが、森之下遺跡（岐阜・高山）でも、船元Ⅰ式以降中期全般（ただし東海系／北陸系の土器が主体）の土器にともなって、身部が楕円形で、つまみ部が中軸線に平行な、周縁部に2次加工が施されているものが確認されている。

こうしてみると、前述の形態的／技術的側面においては、類似した変遷のパターンを描くのは間違いないようである。しかもそれは、例えば御望遺跡のように、少量ではあるが異なったタイプのものが共伴するものも見受けられるが、基本的には北白川下層Ⅱb・c式期にひとつの面期があるという提示はできよう。また本題からは離れるが、霊仙寺遺跡や讃良川遺跡の出土資料をみると、船元Ⅱ式期以降は、いわゆる‘縦型・横型’分類は不適切であると思われる。それ以前には、いわゆる縦型は主体にはならないものの、鳥浜ⅡⅠ～Ⅲ期以降若干確認さ

れることも事実である。また、先端の尖った縦型については、時期が限定される可能性もある。本来ならばこれらの点についても、系統立てた検討が必要であろうが、紙幅の都合上、別稿に期することにした。

4 小結

これまで検討してきたように、形態的側面（左右対称な三角形・台形を呈する）および技術的側面（押圧剝離を用いるか否か）においては、北白川下層Ⅱb・c式期にその特殊性を見出すことができると言えよう。

つまり、近畿地方周辺で、縄文早期末から連綿と続く石匙の伝統が、形態的にも技術的にも徐々に熟成され、船元Ⅰ式期を経て、同Ⅱ式期にはさらなる多様化が見受けられるという理解をすべきなのかも知れない。そしてその一方で、形態的／技術的側面からは、北白川下層Ⅱb・c式期にのみ突然とも言える異質な様相をみせ、それは、ほとんど継承されることなく途絶えてしまうという理解ができよう。

また、使用石材については、時間の経過に左右されるのみならず、流通・獲得システムと地理的条件に多分に影響を受けられると思われるので、形態的側面および技術的側面とは分離して検討を加える必要があるということも、ここでもう一度確認しておきたい。

さてそこで、筆者が気になるのは、技術の起源と普及・拡散さらにはその適応あるいは消滅への様相を、どのようにして理解するかという部分に関わる、以下の問題点である。

第1に、技術が誕生してから、成熟するまでに要する期間はどれぐらいなのか。また、完成した形で確認される（あるいは出現する）技術の起源はどう想定すべきなのか。第2に、成熟した技術の拡散する速度と方向性をどのように理解すべきか。第3に、新しい技術（あるいは流入してきた技術）が、適応を拒否された場合の消滅（退化）の様相を如何にして把握するか。

本稿においては、上述のように、土器の細分型式に基づいて、北白川下層Ⅱb・c式期に特殊性が認められるところまでは、把握できた。ただ、当該石

器をみるかぎりにおいては、前段階のものとは明らかに異質であり、技術的な系譜はイコールではつながらないように思われ、さらに、土器においてはその技術的系譜が考えられうる、この次段階（特に船元Ⅰ式期段階以降）においてもその技術は継承されていない。それぞれの石器型式の時間幅をどう特定するか、すなわち共伴する土器の細分型式の時間幅をどう規定すべきなのかによって、これらの問題はさらに検討できるようになるのであろうが、現時点では、筆者は適当な見解をもちえていない。

そしてさらには、その技術的変遷の要因をも考える必要がある。研究史の中でも触れたが、秦昭繁氏によれば、松原型石匙の場合は、早期末から前期前葉において確認されるものとして理解しえるようであり、また、ある程度広域に分布するものとしても認識されている（秦1991）。出現時期、存続期間については、今回の例とは現時点では異なるものの、その成因等を考える場合には、考慮すべき類例であろう。

おわりに

石器研究の方法論の模索として、北白川下層Ⅱ式（およびその前後）期の石匙を例に、ここまで検討を加えてきた。小結でも述べたように、ある程度の見解が得られた一方で、いくつかの課題も提示し得たように思う。

本論においても指摘したが、石材の流通・獲得システムと、石器製作技術の拡散・収束とは、その経路が部分的に重複する可能性は依然捨て切れないものの、時間的あるいは空間的領域としてはイコールでは理解できない状況というものが存在しそである。この点は、これまでの石器研究において、例えば、石材と技術・技法との関わり等として、問題とされてきた部分にも触れる点であろう。今回の検討を足がかりとして、さらにそれらの関係と、それを支える背景についても検討を加えるべきであろう。

また、今回の検討で感じたこととして、本題からは若干離れるが、素材剝片の獲得方法について、鳥浜貝塚出土の資料についてもそうであるが、その素材剝片の性状が厳密には把握できない（なぜなら素材面の大半を2次加工によって除去しているから）

場合があるため、それ以前あるいは以降のものとは比較しにくいという点があげられる。剥・碎片や石核を含めた、総合的な石器製作技術の検討を行えば、ある程度は復元しうるのではあるが、現時点における発掘調査の成果からは、導きだしにくいと言わざるを得ない。厳密な意味での相伴資料を特定する手段を、早急に見い出す必要がある。

またそれに付随して、石器製作プロセス等を復元するにあたって、接合資料の検討は、本来欠くことのできないものであるが、多くの場合、時間的制約等から為し得ていないのが現状であろう。剥・碎片や石核の分析からある程度の判断は可能であるが、あくまでも推測にすぎないように思われる。それらは厳密には、接合資料等の検討によって追証すべきものであろう。より厳密な、その地点（あるいは時間・空間）内における石器器種製作からその廃棄に至るまでの一連のプロセスを理解することによって、その空間（地点）における作業内容の一端が確実に理解し得るものとなるであろうし、それがその地点（いわゆる‘遺跡’）の性格を理解する基準のひとつになる。

いずれにせよ、これらの点だけではなく、縄文時代の石器研究というものは、まだまだたくさんの課題を残しているのは事実であろう。今後さらに、これらの課題をひとつずつ確実に検討していきたいと思う。

なお本稿を草するにあたり、御教示頂いた方々に、以下にその御芳名を記し感謝の意を表したい。大崎康文、近江貝塚研究会、塩山則之、瀬口眞司、辻川哲朗、中村健二、畑中英二（敬称略、五十音順）。

引用・参考文献

- 中谷治宇二郎 「石匙に対する二三の考察」人類学雑誌40巻4号 1925。
- 堀原 洋 「石匙の使用痕分析～仙台市三神峯遺跡出土資料を使って～」考古学雑誌68巻2号 1982。
- 五味一郎 「石匙」『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』加藤他編 雄山閣 1983。
- 秦 昭繁 「特殊な剝離技法をもつ東日本の石匙～松原型石匙の分布と製作時期について～」『考古学雑誌』76巻4号 1991。
- 鈴木康二 「廃棄を考える～貝塚出土資料の検討にあたっての試論～」『紀要9号』（財）滋賀県文化財保護協会 1996。
- 鈴木康二 「小川原遺跡出土の楔形石器～縄文時代後期にみる技術革新～」『文化財だより221号』1996。
- 『石山貝塚』平安学園考古学クラブ編 1956。
- 『鳥浜貝塚～縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1～』福井県教育委員会 1979。
- 『栗津第3貝塚発掘調査報告書』滋賀県教育委員会、（財）滋賀県文化財保護協会 1997。
- 『栗東町埋蔵文化財調査 1991年度 年報II～下鈎・狐塚・上鈎遺跡～』（財）栗東町文化体育振興事業団 1993。
- 『春期企画展 滋賀の石器時代』野洲町立歴史民族資料館、銅鐸博物館 1995。
- 『追分遺跡・下開田村平遺跡』徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 水資源開発公団、（財）岐阜県文化財保護センター 1992。
- 『御望遺跡～市道西郷1号線建設に係る緊急発掘調査の記録～』岐阜市教育委員会 1995。
- 『門坂シズマ遺跡』建設省、（財）岐阜県文化財保護センター 1991。
- 『堂ノ前遺跡発掘調査報告書～国道360号線バイパス改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』岐阜県・宮川村教育委員会 1996。

編 集 後 記

『紀要』の第10号をお届けいたします。

本号には多数の寄稿をいただいたため、紙幅の関係上、体裁を若干変えざるをえなくなりました。見にくい点等があらうかと思いますが、どうか御了承下さい。

さて、本号をもって、この『紀要』も10歳を迎える事になりました。ここに至る間には、多くの方々の御指導・御協力をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。今後とも職員の研究活動の拠点として、さらに研鑽をつんでいきたいと考えておりますので、皆様からの積極的な御叱正・御鞭撻を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

(T・M、T・T)

平成9年3月

紀 要 第10号

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会
滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL:(0775-48-9780)

印刷・製本：明文舎印刷商事株式会社
滋賀県長浜市森町中久保386